



台湾の公用語は、台湾語にあらず

日本が日本語なので、台湾も「台湾語」だとつい思いってしまいそうですが、台湾の公用語は「台湾語」ではありません。ちなみに、台湾の人は「台湾語」を「台語」と表現します。公用語は、「國語」「台灣華語」と呼ばれ、言語区分としては「中国語（北京語）」になります。但し中国で使っている「中国語」とは、繁体字で表記する点以外にも違いがあります。例えばタクシー。台湾では「計程車」ですが、中国では「出租车」と表現します。ちなみにこれ台湾語だと「計程車」。地下鉄は、台湾では「捷運」なのに対し、中国は「地铁」といった具合です。

また、Rの発音が中国では、はっきりしていますが、台湾ではあまり強調されません。他にも台湾は、発音表記に「注音」（最初の4記号の音から「ボボモフォ」とも呼ばれる）を使うのに対し、中国は「拼音」（アルファベットの組み合わせ）を使います。

台湾では子供向けの本には、漢字の横に「注音」のルビがふられており、この記号の組み合わせが、その漢字の読み方ということになります。



普段何気なく使っているパソコンのキーボード。日本仕様は、カナ入力のための「ひらがな」と「アルファベット」が表記されていますが、台湾仕様のキーボードは、「注音」と「アルファベット」です。本コラム中、何度か書かせて頂いておりますが、中国語ゼロで渡台した私は、研究室内にあてがわれた専用のパソコンを初めて見たときは、目が点になりました。「拼音」の知識もなく「アルファベット」で入力をしようにも、思う漢字が出てこない。キーボードの設定を、即日本語入力に変更したのは言うまでもあります。



せんが、それでもなかなか使い難かったのを覚えていました。

ここにちは、たいゆう ゆうこうかい 台熊友好会です。最近、台湾出身の方々を熊本でも多く見かけるようになりました。そんな中、先日あるお店の方が「台湾語で『美味しい』はなんて言うの？」と、お客様に尋ねているのを耳にし、聞かれた側が一瞬戸惑っているのを感じてしまいました。というわけで、今回は、言語にまつわるお話を少しさせて頂きたいと思います。



ナチュラルトリリンガル？！

台北の地下鉄内でのアナウンスを聞いたことがある方は、お気づきになられた方もいらっしゃるかと思いますが、台湾の公共交通ではそのアナウンスに多様な言語が用いられています。これは2000年に制定された法律に基づくもので、台北の地下鉄では次の停車駅が、「中国語」、「台湾語」、「客家語」、「英語」の四つの言語でアナウンスされます。最近では、これに「日本語」と「韓国語」の2言語も加わったようです。前回民族について少し触れましたが、「母語」もまたその歴史と無関係ではありません。「台湾語」は「ひんなんご」とも呼ばれますか、「中国語」が4声調なのに対し、8声調だと聞いたことがあります。「4声調だけでも難しいのに、8声調もあると、会話をしていて間違わないの？」と知り合いに聞いたところ、返ってきた返答は「間違う！」でした。

台湾の高齢者の中には、今でも丁寧な「日本語」を話す方がいらっしゃいます。日本統治時代、学校では「日本語」を使い、家では「台湾語」や「客家語」などの「母語」で会話をしていたといいます。その後「中国語」が主要言語となっただけですが、時代の流れに翻弄され、当時「中国語」教育を受けられなかった人々も少なからずいたようです。そんな彼らにとってはやはり「母語」が、主要な言語のままなのです。

「客家」系の多い地域、桃園一家の話。父親は客家人であり「客家語」を「母語」としていますが、母親の「母語」は「台湾語」のこの二人の間の会話は、基本「中国語」だそうです。ですが、台湾では日本に比べ互いの実家への往来も頻繁で、子供達も父方の実家では「客家語」を、母方の実家では「台湾語」を使うといい、家庭の中に「中国語」はたまた「台湾語」、「客家語」が混じった状態は、彼らにとってはごく自然のことなのです。

「台湾語」と「客家語」は、似た部分も多く方言に近いイメージですが、今回触れていない「原住民語」も含め、アイデンティティに深く根付いており、これもまた台湾の特徴の一つといえます。

（石橋妙子）

中国語一言レッスン

「不會」
ブウ フエイ

「ありがとう」という感謝に対する「どういたしまして」。「不客氣」が一般的ですが、台湾では可能を表す助動詞「會」を用いた否定の「不會」もよく耳にします。この場合「いえいえ」とでもいった感じでしょうか。「不用客氣」も同様の意味で使われますが、「不會」が最も簡単ですので、是非「ありがとう」の返答を使ってみてください。